幼児の教育　第101巻　第6号　平成14年6月1日（毎月1回発行）昭和23年4月15日第3種郵便物認可　ISSN0289-0836

幼児の教育

家庭・保育所・幼稚園

14.5.22

2002年6月号

第101巻　第6号　日本幼稚園協会

21世紀保育ブックス

これからの保育はどの方向へと向かっていくのか。
新しい21世紀の保育を展望しながら必要とされる諸問題を根本的に掘り起こし、
確実に保育者を導き育て、将来の保育への指針を与える新シリーズ！

編集委員　森上史朗（子どもと保育総合研究所代表）
柴崎正行（東京家政大学教授）
柏女霊峰（淑徳大学教授）

好評発売中

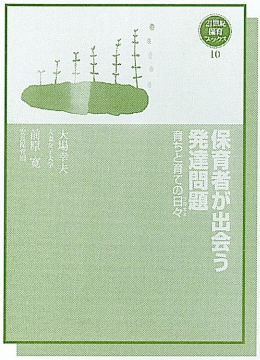
21世紀保育ブックス⑨

自由保育とは何か
「形」にとらわれない「心」の保育

立川多恵子　上垣内伸子　浜口順子
十文字学園女子短期大学

近頃、青少年による問題行動の多発の要因として、幼児教育のあり方が取り沙汰されています。その中には「自由保育」が要因になっているのでは、という声もあります。この「自由保育」批判を耳にして立ち止まり、これまでの貴重な経験や豊富な実践事例、長年の歴史研究を通して、改めて「自由保育とは何か」を模索し、保育の本質に触れていきます。

B６判　184頁　定価：本体1,200円＋税



21世紀保育ブックス⑩

保育者が出会う発達問題
育ちと育ての日々（プロセス）

大場幸夫　大妻女子大学　　前原　寛　安良保育園

私たちが理解しようとしてきた発達は、子どもの育ちという現象を外から当てはめた尺度をもって計りにかけるような捉え方をしがちでした。保育所保育指針や幼稚園教育要領が改訂され、「発達の過程」を大事にするという方向へ進もうとしている現在でも、その姿勢を変えるのは容易なことではありません。一人ひとりの子どもの興味や関心、意欲などを、生活を共にしながら捉えて、育ちの発達にかかわっていくその道行きを大事にしながら、現実の保育の問題として「発達」について考えます。

B６判　208頁　定価：本体1,200円＋税

既刊本

①新しい教育要領・保育指針のすべて	森上史朗　著	⑤知的好奇心を育てる保育	無藤　隆　著
②新時代の保育サービス	柏女霊峰・山本真実　共著	⑥保育者の「出番」を考える	吉村真理子　著
③カウンセリングマインドの探究	柴崎正行・田代和美　共著	⑦地方自治体の保育への取り組み	山本真実・尾木まり　共著
④子ども虐待の理解と対応	庄司順一　著	⑧乳幼児期の「心の教育」を考える	阿部和子　著

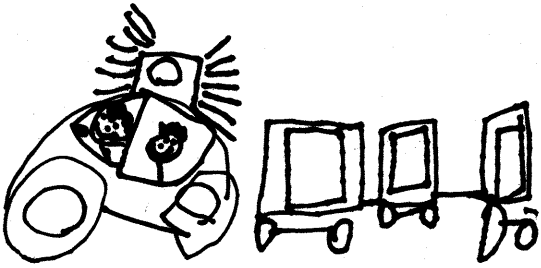
＜以下続刊＞

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育

第101巻　第6号



幼児の教育　目次

——第一〇一巻　第六号——

巻頭言　幸せな人を育てる……山口　茂嘉…（4）

三木成夫といのちの世界

(二)すがたかたちの解剖学　(1)いのちのかたち……吉増　克實…（8）

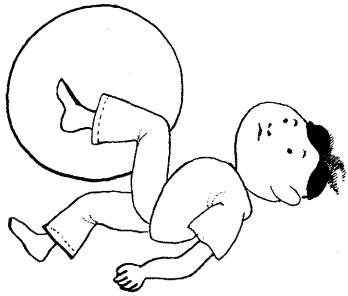
悩める時代の母親たちを支援するとは(3)……田代　和美…（17）

遊びを通して子どもの育ちを考える(2)

ぼくたちの水迷路を作ろう……阿部　康子…（24）

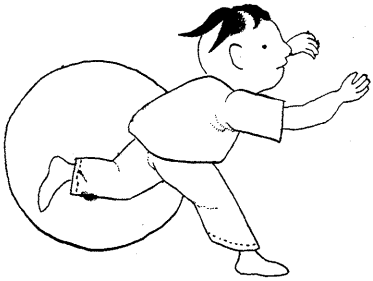
生きもの共存の畝間から(2)　雑草との共生で作物は健康に……徳野　雅仁…（32）

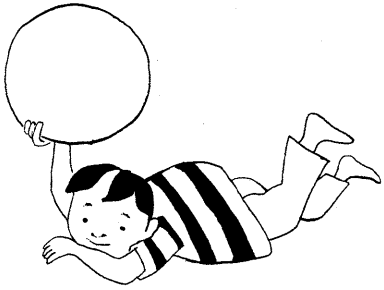
© 2002
日本幼稚園協会



変わるものと変わらないもの―身辺の保育の中で― ……津守　真…（34）
TO・NI・KARAひろば　その二 ……嶺村　法子…（39）
子どもという驚き ……柴坂　寿子…（44）
いま、子どもたちは「教育相談」という仕事……高野久美子…（52）
モンテッソーリ教育思想の誕生(5)
近代社会と知性の形成 ……早田由美子…（56）

表紙絵／佐々木麻こ
扉題字／津守　真
扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児
カット／彌永たたえ　「水玉、水玉」
編集委員／田代　和美・桝田　正子・高橋　陽子
編集部／仲　明子





巻頭言

幸せな人を育てる

山口　茂嘉

子どもの幸せを願わない親はいない。しかし、一体何が幸せなのか分からなくなってきているように思う。有名大学を出て世間体の良い仕事に就き、高収入を得ることが幸せの条件かといえば、決してそれだけではないようである。なぜなら、これらの条件が全部そろって経済的にどんなに豊かでも、不幸な人たちの居ることを、われわれは知っているからである。経済的な豊かさは、幸せの必要条件であるかもしれないが、決して十分条件ではないらしい。しかし、何が幸せの条件であるかを見失った現代の親たちは、「高学歴＝高収入＝幸せ」の幻想に取りつかれて、幼児期から子

どもたちを、受験競争に駆り立てているようである。このような現代社会の問題点を鋭くえぐり出した小説の一つが、城山三郎の『素直な戦士たち』（新潮社）である。

では、一体、幸せとは何なのだろうか。子どもたちが幸せな一生を過ごすために、親として、どのようなことに気をつけて育てれば良いのだろうか。そのことを考える一つの手掛かりとして、長年にわたり不幸な人々の治療にたずさわった精神科医A・アドラーの考えを参考にしたいと思う。彼は、幸せの条件として、次の三つを挙げている。幸せの一番目の条件は、自分の欠点も含めて、自分自身を受け入れることができること（自己受容）である。もう少し分かりやすく言えば、自分で自分が好きであるということである。確かに、私たちは、欠点の多い存在である。しかし、それにとらわれ過ぎて自分が嫌いだったら、それは、とても不幸なことなのである。それ故、欠点も全部ひっくるめて自分を受け入れることができるようになることが大切である。そのためには、子ども時代に親や周りの大人から十分に受容された体験を持つことが必要である。

幸せの二番目の条件は、他の人、周りの人たちを信頼できること（他者信頼）である。私たちは、周りの人たちの信頼によって心理的に支えられているのであり、その信頼が失われれば、失われる程、孤独になり、不幸になるのである。そして、私たちが、人生で最初に出会う人間関係は、家族である。それ故、家族の中で無条件に信

頼され、信頼したという体験が、他者信頼の原点である。

幸せの三番目の条件は、他の人のために役に立てる知識や技術を持ち、役に立っていると感じること（貢献感）である。家族というのは、社会の一番小さな単位であり、父親には父親の、母親には母親の、子どもたちには子どもたちの役割があり、お互いにそれを果たし合うことによって成り立っている共同体なのである。そして、子どもたちは、家庭での手伝いを通して、人の役に立てる喜び（貢献感）を身につけていくのである。

かつて総理府が、国際児童年の事業として、アメリカ、イギリス、フランス、タイ、韓国および日本の六か国における十～十五歳の子どもと、その母親を対象に、生活実態と意識について調査したことがある。その結果をみると、この六か国の中で、一番手伝いの時間が短かったのが日本の子どもであった。そして、「他の人に感謝されたことがある」と答えた割合も低かった。その逆に、学校の授業が終わってから勉強している（させられている）時間は、一番長かった。このような結果から、勉強の意義は認めても、子どもの成長における手伝いの意義を正しく認識していない親が増加しているようである。確かに、最近のわが国では、社会構造の急激な変化、家庭生活の省力化によって、家庭で子どもにさせる手伝いが減少してきたことも事実である。さらにもっと悪いことには、「勉強さえしていれば、何もしなくて良い」という風潮が世の中に広がってしまったことである。その結果、親や周りの人から、いろんなことをしてもらうのが当たり前で、自分が相手のために役に立った喜び（貢献感）を体験しないままで成長する子どもが増えてきているのである。このようにして育った「してもらって当たり前人間」

は、してもらって当たり前、してもらえなければ、不平・不満ばかりの利己的な人間になるのである。これでは、子ども本人だけでなく、親や周りにいる人にとっても不幸なことである。

われわれが、勉強するのは、より多くの知識や技術を身につけて、より多くの人たちのために役に立つ（貢献できる）ようになるためなのである。相手のために役に立てる喜び、すなわち、「働くこと」の根本的な意義が見失われて、ただ「学ぶこと」のみが根無し草のように肥大化してしまったところに、現代のわが国の教育の最大の問題があると考えられる。

幼児期は、「まねる」ことによって、いろんなことを学んでいくとても大切な時期である。この時期からであれば、手伝いを好きにさせるのも無理ではない。そのためにも「頼み上手、まかせ上手」な親になることである。子どもに手伝いを頼むのは、子どもを信頼してその能力を認めることであり、その成果を具体的に認め貢献感の育成を心がけることなのである。そして、このような家庭教育の基礎があって初めて学校教育が意味を持つのである。

幸せとは、「仕合せ」とも書き、お互いに仕え合う（貢献し合う）喜びに支えられたものである。すなわち、幸せな人とは、相手のために役に立てる喜びを知っている人のことである。仕事とは、「仕える事」であり、自分の仕事を通じて、相手に仕えることである。それ故、仕える喜び、役に立てる喜びを知る人のみが、人生の真の幸せを味わうことができるのである。そのためにも幼児期からの貢献感の育成はわが国の重要課題である。

（岡山大学）

三木成夫といのちの世界

吉増　克實

(二)　すがたかたちの解剖学　(1)いのちのかたち

解剖学について

三木成夫は解剖学者でした。それもきわめて独自の解剖学者でした。三木は自分の解剖学を「すがたかたち」の解剖学と呼んでいます。それはどんな学問なのでしょうか。少し長くなりますが、まず三木成夫自身の言葉に耳を澄ませてみましょう。

「われわれの言う『すがたかたち』とは、『心情』の受容的な働きによって自然から受け取られたものであると言う。…そこではすべての近くの対象が周囲と境界のない、そして刻々と変化してゆく生きた『形象』として観察されるのであるが、その場合形象のもつ意味

（こころ）と受容者の心情は完全に溶け合うことになる。現象を『こころ』の現われた生きた『形象』として眺めること…これが心情に由来した生中心の思考形態のすべてであり、われわれの言う「すがたかたち」を見る目そのものと言うことになる。『すがたかたち』とはこの『形象』にほかならないのである。

こうしてこの目で眺めるかぎり、自然のすべての現象は、―動植物から地・水・火・風にいたるまで―あたかも人間の顔貌容姿のごとく、『こころとかたち』を備えた生あるものとして受容されることになる。…ここから、生物の現象の『かたち』を通して『こころ』を見るとき、前者に焦点を当てれば『形態学』が、後者に的を絞れば『心情学』がそれぞれ成立することになる。この生中心の思考に依存するかぎり、われわれはこの両者の間でのみ自然に対することとなり、そこでは学問、藝術のすべてが『生の学』として統一されてくるのである」（解剖学総論草稿）。このような言葉の中に、すでに、すがたかたちの解剖学のもつ広がりの大きさを予感できるのではないでしょうか。

皆さんは解剖学と聞いてどんなことを思い浮かべますか。理科の時間のカエルやフナの解剖でしょうか。そのときに見た肺や心臓や胃や腸や筋肉など何かおどろおどろしく気味が悪い思い出かもしれません。確かに、『解体新書』という解剖学の本が翻訳された江戸時代、解剖は「腑分け」ともいわれていました。それは文字通りからだを切り開き、表面からは見えない内臓の様子を観察することでした。

わたくしが三木成夫とであったのも医学部の一年生の解剖学の時間でした。解剖学の実習はおなかを開いて内臓を見るだけのものではありません。それはおおよそ一年もかかる大変な作業なのです。解剖学教室の人たちの手であらかじめホルマリンで防腐処理され血管に色素を注入された遺体を、ピンセットで結合織をむしり取るようにしながら表面から次第に深部の構造

へと血管や神経や筋肉や内臓を選り分け掘り出していくのです。その作業を通じてからだの構造を知り名前を覚えていくのです。

三木成夫は東大の小川教授の解剖学教室に入室したあと勉強とそんな解剖学の実習の指導をつづけながら、厳密にはひとつとして同じではないヒトのからだを見つづけていました。そして東京医科歯科大学に移ったあとそのような体験がさらに積み重なるにつれ、眼前に次第にいのちのかたちの世界がその独自の姿を現してきたのです。三木をいのちのかたちへと導いたのはゲーテでした。

「ゲーテの目に映った自然—それはこのような生過程の果てしなくつづく波に乗って『根源のかたち』が刻一刻とその姿を変えながら『個々のかたち』となっていわば流転する—そのようなものであった。現実の『すがたかたち』には…『根源のかたちが作られながら、同時に個々のかたちとして作り変えられる』そのような形成過程がこめられているのでなければならない」(解剖学総論草稿)。そして解剖学にも見方の異なる二つの解剖学があると考えるようになってきたのです。それが「しかけしくみの解剖学」と「すがたかたちの解剖学」です。

「しかけしくみの解剖学」はヒトのからだをある目的のために組み立てられた完成した機械として見る解剖学です。機械にはその部品を含めて何のために作られたものか、はっきりした目的が必ずあります。それをヒトのからだに適用すると、例えば、脳はコンピューター、目はカメラ、心臓はポンプといった部品になります。ヒトのからだはそのような部品を寄せ集めて組み立てた精巧なロボットと見られるのです。そうすると、古くなったり壊れた部品は取り替えればいいという考え方も出てきます。それが臓器移植という考えにもつながってきているのです。それはまた自然を人間の意のままに支配しようとする「自然征服の学問」と

呼んでもいいようなものなのです。でも、ほんとうに自然には目的などあるのでしょうか。目的とは人間がその時々の自分の都合で自然に押しつけただけのものなのではないでしょうか。

そのような目的論的な見方ではないもうひとつの見方があります。それはヒトのからだをひとつの自然としてみる見方です。この見方を三木は「すがたかたちの解剖学」と名づけ、自分の研究方法としました。自然として見られたからだには年輪があります。いまのからだには三十九億年の生命の歴史のあとが、その生成変化のあとが、つまりそのなりたちが刻まれているのです。ここには目的も原因もありません。ただ地球から生まれた地球の一部として、地球の変化とともに変化を続けてきた生命の歴史があるだけです。それはあるがままの自然への深い共感をめざす「自然畏敬の学問」でもあるのです。

じつはふたつの見方に応じて、かたちにもふたつのかたちがあるのです。それは「もののかたち」と「いのちのかたち」といってもいいものです。「もののかたち」とは幾何学の三角形のようにいつでもどこでも同じ、時間とは無関係の変化を免れたかたちです。しかし現実の世界にはそのような三角形はありません。それは頭のなかにだけある観念のかたちです。現実の三角形は見るヒトによって、見る角度によって、絶え間なくかたちを変えていきます。生きたかたち、いのちのかたちとはそのように時とともに絶え間なく変化するかたちです。そのようなかたちはなりたちを含むかたちなのです。すがたかたちの解剖学はいのちのかたちのなりたちを研究する学問なのです。

いのちのかたちのなりたちを具体的に研究する方法として三木は三つの方法を挙げています。今生きているさまざまな動

物の体の構造を比較する比較解剖学、化石になった過去の動物の体の構造を調べる古生物学、そしてさまざまな動物の受精卵が胎児として成長していく過程を比較する比較発生学があります。三木はこれら三つの方法のうち特に比較発生学を専門的に研究しました。それがあとで述べる生命史の再現を見せてくれる胎児の世界なのです。そしてこの変化の様相を根源のかたちのその時々の変形、つまり原形とメタモルフォーゼとして表現したのです。

生命の年輪

今生きているさまざまな動物はすべて三十九億年の昔、原始の海に生まれた最初の生命球とつながっています。どの生き物も同じ祖先につながるのですが、そのかたちには家柄の古い動物と新興の動物とがあります。ワニは滅んでしまった恐竜たちと同じくらい古くからいる動物です。それに対して人間を含む哺乳類はずっと新しい動物です。同じ両生類でもサンショウウオとカエルとでは家柄の古さが違います。古生物学と比較解剖学とは過去の動物と今の動物のからだの構造を比較しその変化の歴史を研究するのです。われわれのいまのからだは過去と幾重もの深いつながりをもっています。頭のてっぺんから足のつま先に至るまで体のどの部分もそれぞれの悠久の歴史の物語を秘めています。ヒトのからだは決して理想的に作り上げられた神の似姿ではありません。それどころか地球の環境変化に合わせて何度も増改築を繰り返しながら作り上げられてきた古い温泉旅館のようなものなのです。そこには創立以来の由緒ある部分もあれば、最近できたばかりの新しい部分もあります。それはむしろ理想と言うにはほど遠く矛盾に満ちていて、人間特有の障害をはらんだものでさえあります。古生物学者の井尻正二の『人体の矛盾』（『新・人体の矛盾』と改題、小寺春人との共著として新版が出ている。築地書館）という

本はこのことについてかかれた本で、同じ著者の『地球の歴史』（岩波新書）とともに三木の推薦図書でした。われわれのからだに刻まれた多くの年輪の中から少しだけここにあげておきます。

わたしたちの血液は海水とほとんど同じ成分をしています。子宮のなかの胎児を包む羊水も海水と同じ成分をしています。わたしたちは上陸するにあたってからだのなかにふるさとの海を抱えて上陸してきたのです。哺乳類が「海をはらむ族（やから）」と呼ばれるゆえんです。

ヒトの祖先である脊椎動物は古生代の終わり、石炭紀の古代緑地に上陸を敢行します。そのことによって脊椎動物は大きく姿を変えました。一番大きな変化は、えら呼吸から肺呼吸への変化です。えらが退化したために魚にはないクビといわれる部分ができたのです。

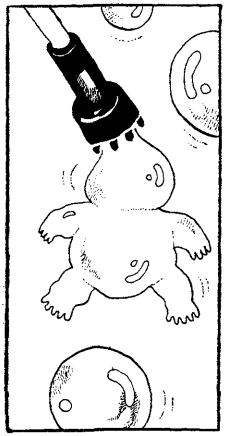
えらはもともと消化管の一番先の部分にありました。最終的に上陸する前一億年、海進と海退が繰り返される干潟に住む魚たちは、えらの腸の最後の部分が風船のように両側に膨らんで肺をもつようになりました。肺ができたあと、やはりふるさとの海が捨てられないで海へ戻っていった魚たちがいます。硬骨魚類と言われる普通の魚たちがそれなのですが、その魚たちがもっているウキブクロは原始の肺の名残です。一度も海を離れることのなかった魚たちがいます。サメやエイなどの軟骨魚類です。軟骨魚類にはそういうわけでウキブクロはありません。

上陸によってえら呼吸が行なわれなくなると、えらの穴は最初のひとつをのぞいてみな閉じました。一つだけ残されたえらの穴、それが耳の穴なのです。三叉神経、顔面神経、舌咽神経、迷走神経などのもともとのえらの神経核は、えらがあったときと同じように脳の中に並んでいるのですが、それらが支配するえらを動かしていた筋肉はほかの用途に使われるようになり

ました。そのひとつが哺乳類で豊かに発達する表情筋があります。喜怒哀楽を表す表情を作っているのはえらを動かしていた筋肉なのです。

えら呼吸から肺呼吸への転換は、われわれに運命的な弱点をもたらしました。えら呼吸は心臓や腸と同じように内臓筋による無意識の自律的な運動です。しかし、肺呼吸は胸部を広げたり狭めたり横隔膜を上下させて陰圧を作り、肺に空気を入れるようにしなければなりません。これらはともに内臓筋ではなく骨格筋を使わなければならなくなったのです。そのために魚のような自律的な呼吸は失われてしまいました。人間が行動するとき「呼吸」をどうはかるかということが常に大問題になるのはこのことに由来するのです。

わたしたちの背骨は前後に彎曲しています。しかしこの彎曲は魚の時代にはありませんでした。ニシンでもサンマでも食べた後の骨を見ればわかるとおりまっすぐです。両生類になって陸上で体重を支えなければならなくなり背中側に向けて彎曲ができます。さらに爬虫類になるとクビができて今度はおなかに向けて曲がります。さらに哺乳類になり腰の彎曲が形成され、最後に人間が直立すると腰の彎曲がさらに深くなると同時にクビがもう一度反対に顔の側に曲げられることになります。背骨が強く曲げられている部分、クビと腰は人間の最大の弱点です、むち打ち症とぎっくり腰にはそのような生命の歴史と関連する背景があるのです。



胎児の世界

三木成夫を導いたもうひとつの言葉にドイツの発生

学者ヘッケルの「個体発生は系統発生を繰り返す」という言葉があります。受精卵は胎児として成長する過程で生命の歴史を大急ぎで復習してから生まれてくるのです。脊椎動物の胎児は、魚の時代、両生類、爬虫類の時代を経て、原始の哺乳類から人間へと成長していきます。数十億、数億年の生命の歴史がそこに再現されているのです。それは生命が再生更新される過程といってもいいのです。生命は生殖を通じて次の世代へと更新されます。そしてその一つ一つの生命はそれまでの一切の生命史を生きなおして新たに個体となるのです。

進化の歴史を繰り返すといっても、例えば数億年の歴史が数日数ケ月と言った短い期間のうち再現されるわけですから、古い時代のできごとなどはまぼろしのようにたちまちにして過ぎ去ってしまいます。ただ古い形の生き物ほど古い段階がゆっくりと進むのがみられるのです。

比較発生学の具体的な研究方法を三木に教えてくれたのは東北大学の浦教授でした。それはさまざまな動物の胎児の心臓にガラスの針をさし、墨汁を注入して血管が見えるようにしてその変化を研究する方法です。

三木が研究したのは脾臓のなりたちです。脾臓は人間ではその成り立ちがわからず「神秘に満ちた臓器」と呼ばれていたのです。三木はヤツメウナギとオオサンショウウオとニワトリの胎児の発生を調べ、ニワトリの胎児の脾臓がヤツメウナギに見られる腸にくっついた脾臓から、次第に陸上動物の持つ独立した脾臓に変わっていくさまを見出しました。それはえらの退化の前に起こるのです。三木はこれをかつて脊椎動物の進化の歴史に現われたできごとの再現、つまりシルル紀の海からデボン紀の水辺を経て石炭紀の古代緑地への生命の上陸の再現と見たのです。それはニワトリの発生の四日目を中心に走馬灯のように見られるという

のです。

三木はまたこのような方法で心臓がどのように生まれ、えら呼吸から肺呼吸への変化に伴ってどのように分化していくのかを、えらの循環から肺の循環への循環系の変化とともに研究しました。そのもっともわかりやすい成果は『胎児の世界』（中公新書）の中に載せられている心臓の奇形についての物語です。生まれてくる赤ん坊にときおり現われる心臓の奇形がポリプテルス型、アミア型、ニジマス型など家柄の古い魚から新しい魚と同じであることを見出したのです。胎児の肺静脈は心臓に戻るときにいろいろの道筋をとおります。そしてウキブクロになった硬骨魚類のタイプと肺になった陸上動物のタイプでそれぞれ三つに分かれ、それらが発生の途中にいっしょに出現しているのです。そしてまれに先祖の心臓をやどした赤ん坊が生まれてくることがあるのです。その心臓の奇形は一億年の月日をかけて上陸した生命と海に戻っていった生命とのおもかげをやどしているのです。

三木はヒトの胎児の心臓に針をさすことはしませんでした。しかし、藝大の学生への特別講義で生命の歴史をどのようにして伝えるべきかを悩み、集められていた胎児の顔を見せることを決意します。胎児の顔はふつうには隠れて見えないのです。長い逡巡のあとようやく切り落とされあらわになった胎児の表情には、目を追って変化する生命の歴史が現われていたのです。三十日の胎児には生きている古代魚ラブカの、三十六日の胎児にはムカシトカゲのハッテリアの、そして三十八日の胎児にはすでにけもののミツユビナマケモノのおもかげが現われていたのでした。

次回はすがたかたちの解剖学の中心主題、原形とメタモルフォーゼの話です。

（東京女子医科大学第二病院）

悩める時代の母親たちを支援するとは(3)

田代　和美

二、三月号で母親を支援することについて拙い文章を書いた後も、様々な事が生じ続けている。自分の文章を読み返すと、私は甘いのだろうと思う。そして子育て支援の取り組みでかかわっている幼稚園の園長先生から、今までだったら「子どもの親」としてかかわっていればよかったのが、「個としての母親自身」をまず受け止めなくてはならないのが現状であり、こちらの前提を現実は遙かに越えているという旨の話を聞かされるとさらにその思いは募る。

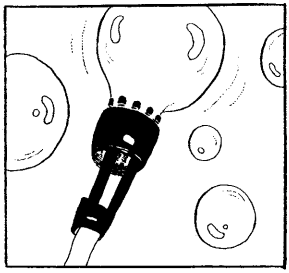
自分の子どもの保育園の母親たちは結構仲がよいと思っていた。ところがここに来て、母親同士のトラブルが父母会運営にまで波及してしまう事態が生じた。元はと言えば、子ども同士の問題を

解決したいと願った一方の親が、相手の親と親しくなって話を色々と聞いてあげることで相手の親のストレスが軽くなれば、その子どもが安定する。その結果、自分の子どもが危害を加えられなくなる。そう考えたことから始まったようだ。家族ぐるみでつきあうようになる中で、急に距離が縮まり、家庭内のプライベートなことまで話す間柄になり、その中での些細な一言が、顔も見たくなければ一緒に活動もしたくないという決定的な決裂に至ってしまったらしい。

それからしばらくたって、クラスの子が風邪をこじらせて入院してしまったことを家で子どもから聞いた。こういうことに私は弱い。近くの大学病院に入院しているとすれば、二十四時間親が付き添うか完全看護かのどちらかを選択させられる。完全看護といっても、実際には手の足りない病棟でベッドに縛り付けられる子どもの姿を何度も目にしている。想像しなければよいのだが、どうしても頭に浮かんできてしまって居ても立ってもいられなくなる。下の子どももいるのでどうしているのだろうとこれまた気にかかって仕方がない。だからといって私が身代わりになれるわけではないし、冷静な目でみれば無意味なことに私は捉えられてしまう。落ち着かない気持ちで過ごした翌日の夜、結局電話を入れた。父親が出て、なんと兄弟そろって入院してしまったという。上の子どもの方はもう元気で退院出来そうだということだった。少々ほっとはするものの、でも一人が退院して一人が入院しているというのは考えてみれば大変なことだ。気が張って疲れも感じずにいるのだろうが、でもきついだろうなあと感じてしまう。私は状況を伝えるためにクラスの母親に電話を入れてしまった。そして思わぬ反応に出会った。「何をすればいいのか」という困惑と「あち

らのご家庭にも色々ご事情があるでしょうし」という距離感だった。どこかに気持ちを共有出来るという私の甘い期待があったことが露呈される。それにもかかわらず私は翌朝、コンビニで買った数種類のドリンク剤と子ども向けの遊具とともに身近にも手伝えることは手伝いたいと思っている仲間がいるんだよという趣旨のメモをその家の玄関においた。帰る道すがら、電話口の母親と同じように感じるのだとしたら、迷惑な思いをするのかもしれない。そういえば私だって彼女とどれだけ言葉を交わしたことがあるというのだろう……と不安な思いを抱えつつ、それを振り切るように自転車をこいだ。こういうことで不安になったのは初めてだった。その夜、今まで聞いたことのない明るい声で「ありがとう。すっごくうれしかった」と彼女から電話が来た。ちょうどその日に二人そろって退院出来たのだという。

これらのでき事から引きずっていることがある。自分の母親たちとのかかわりかたである。なんでこうもお節介なのだろうか。しかも距離を置きたがる親たちとの間で。相手は本当にありがとうと思ったのだろうか。今回は声からしてそう思えた。でも相手が余計なことをしてと思ったとしたら、私の行為は押しつけがましさ以外の何者でもない。今回は現にそれを不安に思いもした。自己満足のためではないのかという問いも何度も押し寄せた。そうやって自分の内にベクトルを向けて考え続けると、どうやってかかわったらいいのかが分からなくなってしまい、結果として



距離を置くのが一番無難なのだということになってしまう。先にあげた母親同士のトラブルや、電話口で聞いた反応と同じところに行き着いてしまう。他者との遠い距離。でもこの距離を維持しようとすると、初めに挙げたような親同士のトラブルを誘発するのだと思う。距離を保てなくなった時に密着するという反対の極に一っ飛びに移ってしまうのだと思う。挨拶を交わす程度の距離か全面的に密着してしまう距離か、一〇〇か〇かという距離感。自分の身を自分で守るか、守ってくれる人に全面的に依存するか、この二つの距離でしか関係が成立しにくい。それが今の子育てをしている親たちのシンドサの底辺に流れているように感じる。人に迷惑をかけてはいけない。そう言われて育ってきた。多分学校でも、職場でも自分ひとりの力で頑張ってきたのだろう。自分で自分の身を守ろうとするその体勢のままで子どもを育てているのだとしたら、子ども共々閉鎖された世界で生きていくことになってしまう。

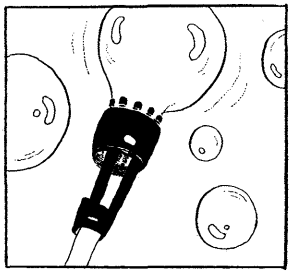
こういう回路をうろうろと歩いていると、とてつもなく辛くなってくる。前回書いた自分自身にだけ意識が向いていて関係性が見えてこない状況に陥ってしまう。もっと素朴に描いてみよう。私が大変そうな人を見てかかわってしまうのは、多分自分もそうしてもらってきたからだ。ただ素朴にそれだけのことなのだ。上の子どもが生まれてから隣近所の人たちに沢山助けてもらってきた。高熱をだしてどうしていいか分からない夜に隣のドアを叩いて助けを求めたこともある。その翌朝には温かいフレンチトーストを運んできてくれた。自分が忙しくて食事や離乳食を作ることもままならなかった時に「豚汁いっぱい作っちゃったから」とお鍋ごと運んでくれるような人たちがいた。どうも食べ物のことばかりが思い出されるよ

うだが、決してそうではない。相手にとっては何ということもない行為だったのだろうと今となっては思える一つひとつのことが私にはこの上なくありがたかった。その人たちに何かお返しをしたのかというとそれは多分してはいない。貸し借り関係や支配関係をつくるための行為ではなかったからだ（と私が感じたからだ）。他の人にそのお返しをするという目的的な部分もないとは言えないが、そうしてもらってきたからそうしてしまうという身体に染みついた感覚で私は動いてしまうのだと思う。

自分の内にベクトルを向け続けた時の自己満足ではないのかという問いや閉塞感と素朴な自分の感覚とのギャップ。これらを抱えた中で引きつけられていったのは鷲田清和の著作だった。著作内での文脈とは別の文脈に置きかえてしまうことを恐縮しつつ、いくつか引用してみたい。

「他人へのケアといういとなみは、まさにこのように意味の外でおこなわれるものであるはずだ。ある効果を求めてなされるのではなく、『なんのために？』という問いが失効するところで、ケアはなされる。こういうひとだから、あるいはこういう目的や必要があって、といった条件付きで世話をしてもらうのではなくて、条件なしに、あなたがいるからという、ただそれだけの理由で享ける世話、それがケアなのではないだろうか。」

（『「聴く」ことの力』TBSブリタニカ）。初めての子育てで大変だった時に周りの人たちから差し伸べられた手によって、私は人から「享け



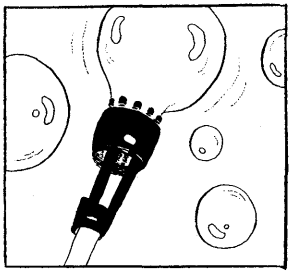
る」ことのできる自分という久しく忘れていた自分を発見したのかもしれない。「生まれ落ちたらすぐに他者への全面的な依存関係に入る」ことが「享ける」ことの典型例として描かれているのだが、親からすれば子育ては要介護5の状態にある人間を世話することから始まる。しかもかつて「享けた」時代以後の長い期間、自分で自分の身を守る体勢で生きてきた人がだ。ケア関係に入った人は「享ける」ことを充分経験する必要があるのだと思う。子どもが存分に「享ける」ことができるためにも。

でも「享ける」行為を巡る大人の人間関係はどう考えたらいいのだろうか。いくつか考える発端を示してくれる文章を引用したい。「わたしがわたしじしんであるためには、彼（あるいは彼女）じしんであるためにはどうしてもわたしが必要となる、わたしと彼（あるいは彼女）とのあいだのそのような関係は、これから達成されるべき関係であるというよりもむしろ、わたしが〈わたし〉じしんであるために、いつもすでに前提されている関係であるのではないだろうか。」「じぶんから他者を見るのではなく、自分を見る視線を他者のほうに設定する。『じぶんが』と考えるのではなく、他人のための、他人にとってのじぶんというものを考えるということは、それほどかんたんなことではないのだ。」（『じぶん・この不思議な存在』講談社現代新書）。「ひとはたしかに独りでは生きていけない。生まれ落ちても独りでは飲み食いすらできないし、死期が近づいても独りで棺桶に入ることもできない。ひとはささえあいながらしか生きていけない。だが、そのささえあいというものがとにかくむずかしい。ささえられるということともたれるということの違いを知るのがと

くにむずかしい。もたれあわないささえあいというものを求めて、独りもがき苦しんでいるひとがこの世には存外多いのではないか。」（『まなざしの記憶―だれかの傍らで』ＴＢＳブリタニカ）。簡単に答はでない。でも関係なきところに自分などというものは存在しない。自分で自分の身を守ろうとすることからくる閉塞感は窮屈だし退屈だ。窮屈や退屈にではなく子どもと過ごす日々を楽しみたいから関係性にこだわり続けていきたいが、先は遠い。

子育てにかかわる親以外の人間が段々と公的な立場の人になっていきつつある。園での子育て支援も何らかの資格を持った人がかかわる方向になりそうだ。家族か専門家か。子育てにかかわる人を二極分化して狭めてしまうのではなく、生活という日々の営みの中でできることはないのだろうか。その途を拓いていくことが子どもの育ちにとっては大切なことに思える。時代に逆行しているのだろうし、やはり私は甘いのだろうとも思うが、それを貫いていきたいと今は思う。

（お茶の水女子大学）



遊びを通して子どもの育ちを考える(2)

ぼくたちの水迷路を作ろう

阿部　康子

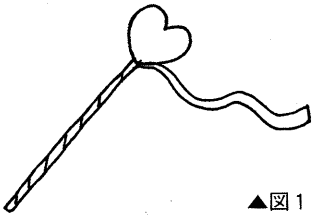
六月七日（木）

「おはよう！」とたつまとたかゆきが保育室へ飛び込んできた。八時三十分、一番乗りである。「せんせい、まだだれもおらん？」「そうよ、たつま君、たかゆき君が一番！」と応じる保育者に、それぞれが「ふ～ん」と言いながら出席ノートをかばんから出し、本日のシールを貼る。貼り終えると「せんせい、自転車に行ってきまあす」と園庭へ駆けて行った。

たつまはお気に入りの黒いハンドルと荷台つきの自転車を出し、得意気に走りだした。たかゆきもつ

い最近までつけて乗っていた補助輪を外して乗れるようになったのが嬉しい様子で、たつまの後に続いた。二人は自転車で園庭を走りながら、こうきやたつや、ゆうすけたちの登園を待っているようである。しばらくするとこうき、たつやが登園し、自転車隊に加わる。四人は一列につかず離れずの距離を保ちながら園庭を回る。見ていると、互いに大声を掛け合いながら走っている。何を言い合っているのかと近付いて見ると、「十回、十一回、十二回」と走り回る回数を数えている。

三十回を超えた頃、ゆうすけが登園した。「ゆうすけ、自転車」とこうきが声を掛ける。「うん、すぐ行く」とゆうすけは答えて保育室へ向かった。しばらくしてゆうすけも自転車隊に加わり、仲間入りとなる。「せんせい、来て」とさとこに呼ばれて、かなり賑やかになった保育室に戻る。「せんせい、リボン頂戴」「どんなのがいいの?」「どんなのでもいいけど」「何に使うの?」「お誕生ごっこに使うから」と、広告紙を巻いて作った棒の先につけるリボンと言う（図1）。「じゃ、この箱の中からどうぞ」とリボンの箱を渡すと、さとこはピンクのリボンを選び、切る。あすかもななこもあやかも「わたしも」とリボン屋さんは忙しくなった。



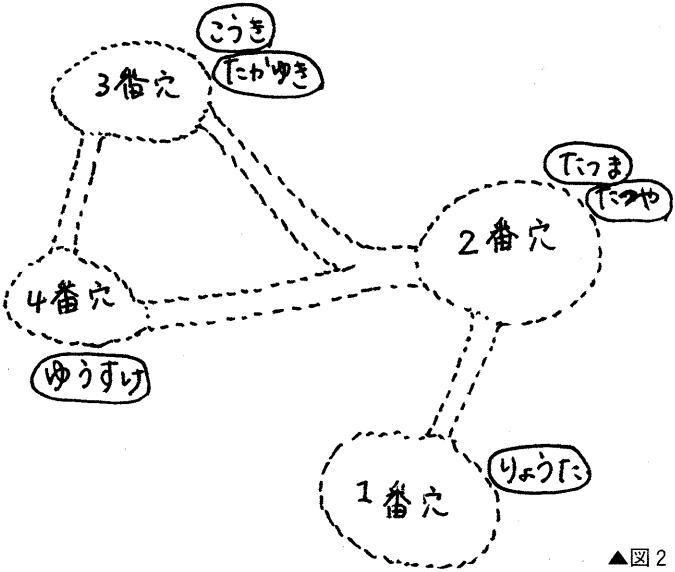
▲図1

その時、自転車隊のこうき、たつまたちが廊下越しに「せんせい、裸足になっていい?」と大声で私に言う。「いいよ、怪我しないように気をつけてね」「うん、分かっとる」とこうきは裸足になり砂場へ走っていく。「僕も」「僕も」とこうきに続く。「何が始まるのかな?」と声を掛けると、ゆうすけが「水迷路作るの」と言う。「水迷路か、難しい

よ」と言うと、「この前たかゆきとゆうきとで作ったことあるもん」と砂場へ走っていった。

子どもたちが砂場へ入ったのを見届けて、再び棒にハートやお花、リボン付けのお手伝いに戻る。忙しさに紛れて、水迷路のことは気になりながら砂場へ行くチャンスを失っていた。と、「せんせい、来て」と興奮した面持ちでたつまが私を呼びに来た。「どうしたの？」と急いで砂場へ行くと、直径八メートルはある砂場一杯に幾つか穴が掘られ、それぞれの穴を繋げるよう水路らしき物が掘られている（図2）。

「へえ、すごいね、こうちゃんとたかくんの穴は高い場所なんだね」というと「そう、僕たちのは三番穴だよ」「じゃ、たつまくんとたっちゃんのは？」「二番穴」「へえ、番号がついてんだ。りょうちゃんのは？」「一番穴」「ゆうすけ君は？」「四番穴だよ」「一番始めはどこから水が流れるの？」と感心



▲図2

していると、こうきが「たつま、ゆうすけ、水を流すぞ！　せんせいも見とってよ」と、こうきは③の穴へ水をバケツでザアーッと入れる。

水は実に美しい流れを作り出して④、②の穴へと流れていく。そして①の穴へと流れていく。③の穴の位置が他の穴よりやや高いことで、水の流れにスピードが加わり、美しさをより強調しているのであろう。子どもたちは何回も③の穴に水を流し込み、水が穴からあふれて二本の水路を流れ落ちていく様子に「スゲエー」と感動している。そのうち水は④と②でほとんど吸い込まれて、①の穴へたどり着くまでに水量が減って勢いがなくなる。

調子が悪いことにりょうたが気付き、「なんで僕とこへ来んの？　たつまのとこが邪魔しとる」と怒りだす。保育者は「どうして来ないかな、水が少ないかな」と、りょうたと二人でたつま、たつやの穴と水路の様子を見る。りょうたの水路はやや浅い上に、上から砂が流れ込んでいることもあって水が流れ込みにくくなっている。

「りょうちゃんとこの水路をもう少し掘ってみようよ」と一緒に掘る。水路は低くなり、②の穴から水が流れ込んできた。嬉しくなったりょうたは水をどんどん②の穴へ流し込もうとする。こうき、たかゆき、たつまたちが、「水は俺たちの穴（③の穴）しか入れてはいかん」と抗議しだし、水路の間を歩き回るので、水路が崩れ始めてしまった。すでに砂場全体が水でグチャグチャになり始めている。私は「どうしようか、せっかくうまくいっていた水迷路だったのに…」という思いを込めて、「困ったねえ、穴も崩れそうになってきたよ」と六人の顔を見つめた。

しばらくして、たつまが「穴堀り競争しよう」と言い出した。①の穴か②の穴か③か④かと互いに深さを競い合うことになった。「オレたちの方がぜっ

たい深い！」とこうき、たかゆき組が言えば、たつま、たつや組は「オレたちの方が深いに！」。一人で掘っているりょうたとゆうすけはもくもくと掘る。

穴を掘るのに一応の満足をした六人は、穴の深さを比べようということになり、調べる方法は先生が穴の中へ入ってみることになった。私は①から順に入る。「せんせい深いら」「うん深いね。よく掘れたね」。②の穴も入ってみる。「ワア怖い！」「どっちが深い？」「同じ位かな？」と言いながら③に入る。この時、こうきの期待に満ちた表情にぶつかり、「こうちゃんの穴もスゴイね」と驚くと、「一番深いら」と言う。「そうかなー、深いね」とあいまいに言葉を濁しながら④の穴へと進む。

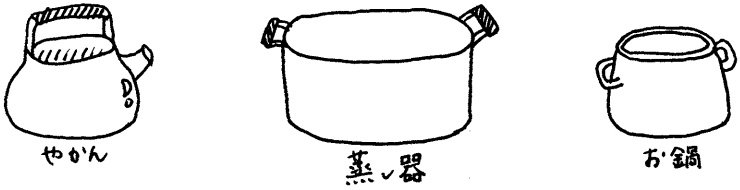
ゆうすけは「ぼくのとこは、熱くなった足を冷やすとこだもんで、深くしとらん」と、深さ比べからはリタイア。「ヘエ、熱くなった足を冷やすところね、それもいい考えね」とゆうすけのアイディアを認めながら話していると、次はそれぞれの穴へ水を入れるという。どの穴が一番早くいっぱいになるか、である。

こうき、たかゆき組はやかんがいいか、お鍋がいいかでもめたあげくやかんになる。

たつま、たつや組はこれが一番、と大きな蒸し器を探してきた（図3）。

りょうたがお鍋となって水運びである。

お鍋組、やかん組、蒸し



▲図3

▲お鍋組、やかん組、蒸し器組の水運びが始まった

▲砂場は次第に賑やかになっていく

器組がお互いの速さを気にしながらの水運びが始まった。蒸し器組のたつまが「これ重いわ」と音を上げる。たつやが見にきて「半分にした方がいいわ」と量を減らし、二人でさげて運ぶ。やかん組のこうきは運ぶ回数も多いが、素早い。砂場は次第に賑やかになっていく。砂場の動きは次第に活気づき、ゆうき、わたる、てつや、ことむも仲間入りして一段と賑やかさを増していった。

ふと気がつくとゆうすけが裸足で砂場にいる。ゆうすけは年中組の四月に転園してきて以来、一度も素足で園庭に出たことがなかった。保育者が「気持ちいいよ、裸足になってみようよ」と誘っても頑として裸足になれなかった。今日は何と裸足で、夢中で砂を掘り、水を流しているではないか。「よかった！」と思いながら「ゆうすけ君、裸足気持ちいいね」と声を掛けると、「うん、僕裸足初めて、でも気持ちいい！」と答えてくれた。

保育者が思ったこと

ア　自転車に乗って何回も走り合い、互いに声を掛け合ううち、水迷路作りへと気持ちが動いていったこと。

イ　③の穴を高い位置に作り、水が流れ下りていくことを予測して水路や穴を掘っていったこと、水を実際に③の穴へ流し、その水がそれぞれの水路を通過して穴から穴へと流れる様子を六人が息を凝らして見つめ、やったあー！と感激をともに味わったこと。

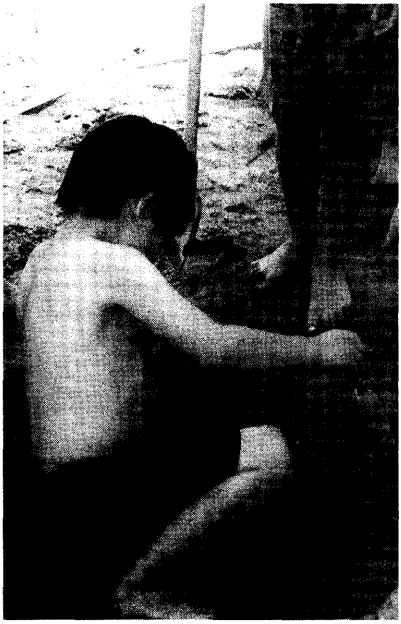
ウ　水を流すことで砂場に作った水迷路が崩れ始めると、次の目標「穴をもっと深く掘ろう」「穴へ水を入れよう、どの穴が早いか」が生まれ、再び夢中になっていったこと。

エ　遊びに夢中になってゆうすけが自分でも気が付かないうちに裸足になっていた、そしてゆうすけ自

身「きもちいいー」と思ったこと。

オ　今までこうした遊びに参加してこなかったゆうき、てつや、わたる、ことむが「穴に水を入れよう」の段階ではあったが、初めて仲間入りできたこと。

などが大きな収穫であり、保育者にとっても嬉しい日であった。



▲「穴はどこまで掘れるか」と、子どもたちは砂場を掘り始めた

七月に入ってのこと、「穴はどこまで掘れるか」と、子どもたちは砂場を掘り始め、ついに底のコンクリートにスコップがカチンとぶつかってびっくり！

砂場のことは何でも知りたい子どもたちである。

（愛知双葉幼稚園）

生きもの共存の畝間から(2)

雑草との共生で作物は健康に

徳野　雅仁

記憶に残る植物や小動物との最初の思い出は、ヤツデの花と大きなカタツムリでした。四、五歳の頃ではなかったかと思います。母親と共に何度か訪れた家の窓際に植えられていたヤツデの不思議な花のかたちに魅せられたのでした。カタツムリとの出会いも同じヤツデの葉上でした。大きな葉の上で行き来する数匹のカタツムリをいつまでも眺めていた思い出は今でも忘れることができません。

その日は雨でしたが、以来、雨の日が好きになり、子どもの頃は縁側で一日中雨を見て過ごしたこともあります。屋根からしたたる雨だれや、植物の葉上で銀色の雨粒が無数にはじけ散る様子に見入っていたものです。

春のタネまきを済ませて一段落する六月。自然菜園は、新しく芽ばえた若い夏草が生長をはじめ、緑一色に包まれます。従来の畑では生やしてはいけないとされている雑草も、作物と美しく調和し、見事な共生関係をつくり上げています。

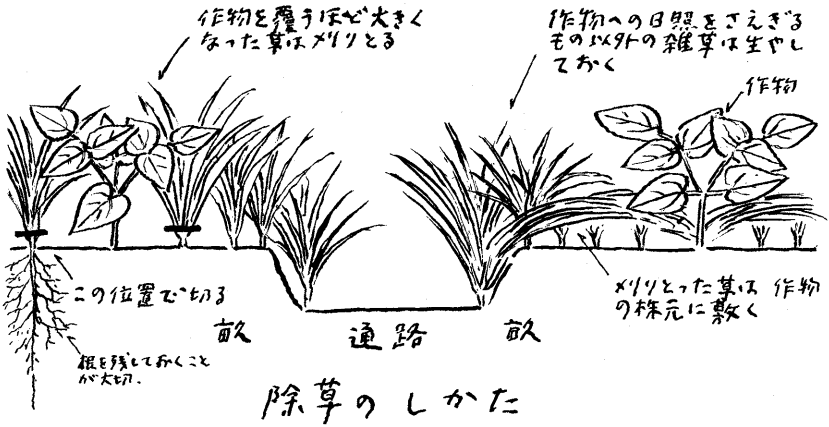
六月は梅雨入りの季節で、次第に雨の日が多くなります。雨は植物にとっては恵みの雨ですが、高温多湿のこの時期は反面、作物にとっては病気が発生しやすい季節でもあります。その病害感染経路ともなる雨の日の、作物への土砂のはねかえりを防いでくれるのが雑草で、夏にかけての病虫害予防にも雑草は欠かすことができません。とりわけ、キュウリ、カ

ボチャなどのウリ類への土砂のはねかえりは致命的でもあり、また、サラダナ類やシュンギクなど、生食する野菜は、雑草が周囲にあることによって汚れのない瑞々しい収穫が得られるようになります。

雑草はこのように、作物を守るほか、雨による表土の目づまりを防ぎ、土壌中への酸素の供給を助ける役目も果たしています。また、夏の地温の異常な上昇を防ぎ、土の乾燥から作物の根を守り、天敵の棲み処にもなり、日々、私たちの目の届かないところで野菜を食害する虫を捕食し虫害を防いでくれているのです。作物の葉の裏をのぞいてみると、他の昆虫を捕食する天敵のクモをよく見かけます。葉裏に生みつけられた卵を数日追ってみると、フ化した幼虫のほとんどはいなくなり、生きのびて大きくなった幼虫を見かけると愛しく思えるほどです。

作物を栽培し、土壌環境が変化すると、畑に生える雑草も次第に淘汰され、作物と共生できるものが自然に残ります。エノコログサ、メヒシバはそうして残った夏の畑の代表的な雑草でしょう。そして、雑草はできるだけ抜きとらず、除草するときは、できるだけ根は地中に残して、地際から刈りとり、刈りとった草は作物の株元にねかせます。刈りとりは作物を覆うほど生長したもののみ行うだけで十分です。

（イラストレーター　イラストも筆者）



除草のしかた

変わるものと変わらないもの

―身辺の保育の中で―

津守　真

私の身辺で

最近私は毎週二日、保育の現場に出ている。私が長年かかわってきた愛育養護学校の現場である。近年、幼児が減少していたが、今年はどういうわけか急に幼児が増えた。養護学校を必要とする幼児が増すのはよいことなのかどうか、疑問のあるところだが、私共の養護学校はむかしから、障碍をもっていようといまいと、幼児の保育は変わらないと考えてきたから、いろいろな幼児が楽しみにして来てくれるのは嬉し

い。幼児と交わるのは、私にとっては故郷にもどるようで、力が湧いてくる。

そうは言っても、集まる子どもによって、具体的な保育の仕方は違ってくる。障碍をもつ子どもが多く集まる私共の学校には、長年の間にそれなりの文化が生まれるのもまた当然であろう。

養護学校と幼稚園

最近、私共の養護学校にも、時代の変化を感じさせられることがある。障碍をもつ子どもと通常の学校や幼稚園の子どもとが混じる機会が増えたことはそのひとつである。以前だったら、小学校、幼稚園と養護学校とは別の種類の場所だという観念が社会一般にひろく行き渡っていたが、最近は、学校制度は違っても、一緒に付き合ってみれば、子どもはだれでも親しみ深く、互いに学ぶことが多いことが、大人にも子どもにも分かり始めてきたと言ってよいだろう。決してまだ十分とは言えないけれども。

私共の養護学校と金網の柵を隔てて幼稚園がある。子どもたちの賑やかな声が聞こえると、そちらに行きたい養護学校の子どもがいる。そのときに一緒に出掛けて行くと、最近では幼稚園の先生方は喜んで迎えてくれるようになった。最初は、子どもはこちらの部屋からあちらの部屋へと探索してまわり、一緒に行った私は気が気でないことが多かった。互いに他の子どもの持ち物にさわったり、しきたりとは違うように

行動したときには、間に入る大人はどうしたらいいか戸惑うことがある。神経を使い過ぎると不自然になるし、間で執り成しを必要とする場合も少なくない。けれども子どもは他の子どもたちのすることを見ていて、互いにそれなりに馴染んでいった。幼稚園の子どもが養護学校に来るときも同様である。理念が先立つのではなくて、子どもたちの中の自然さが大事なのだろう。勿論、大人の側に相互の理解を深めようという努力が下地にあるのだが。

私共の養護学校で、このことに先鞭をつけてくれたのはまず兄弟姉妹たちだった。長年の間に、一、二歳のころから、養護学校で自分たちが遊び親しんで成人した子どもたちは数多くいる。そういう子どもたちが最近更に多くなっている。

それぞれの子どもが納得するように

ある日、帰りの時間近くに私が幼稚園に行くと、窓越しに私をじっと見ている子がいるのに気が付いた。私が笑い返すと、「おじいちゃん、待っててね」と手を振って私を呼んだ。最近地方から養護学校に転校して来た子どもの弟の四歳のRくんで、彼は幼稚園に入園している。幼稚園が終わると駆け出して来た。幼稚園から戻ったばかりの子どもには、緊張から解放された激しさがある。この日のRくんは声も大きく、動きも激しかった。養護学校のホールでは隅の櫓の上でひとりの子どもが遊んでいた。Rくんは櫓の下にあった籠にピンボウルを入れ、苦心して籠に綱をつけて櫓の上

に引き上げた。櫓の上にいたもうひとりの子どもは、その籠の中のピンボウルをひとつずつ籠から取り出して斜面を下に滑らせた。Rくんは、自分が発見して吊り上げた籠の中の物を勝手に落とされたので、激しく怒ってその子に掴みかかろうとした。こういうとき、養護学校に所属する大人としては、まずこの場所の主人公である手足の不自由な子どもを守ろうとするのは当然である。私もそうだった。私は何か道徳的なことを言おうとしてRくんを見たら、怒って真っ赤になったRくんの顔は涙でくしゃくしゃだった。本当に真剣で、この子をそのままにしておけないと思った。

保育者は、あるときには他のことはおいてもその子をしっかりと守らねばならないことがある。このときの私はそんな気持ちだった。「おじいちゃんが助けにいくからね」と声をかけて急いでRくんの傍らに行った。この子どもは体の不自由なきょうだいのために譲らなければならない場面を多分何度も経験しているだろうと私は思った。こういうとき何と言ったらいいか、とっさに考えて、「これはおじいちゃんが守ってるからね」と、しっかりRくんを抱いてピンボウルを籠に戻した。しばらくこの子の傍らにいるうちに、じきにこの子は立ち直った。

この子はピンボウルのことは忘れたかのように、櫓と壁のすきまの狭いところに入りこむことが面白くなった。ピンボウルを滑らせた子も同じことがやりたくて、一緒に狭い空間の中で、物を渡したり受け取ったり、やりとりが始まった。私はほっとすると共に、子どもの力はなんと大きいことか、感心した。相手の子にとっては元気の

良い幼稚園児の迫力を受けるのは重すぎる荷だったかもしれないが、この子たちはよくそれを持ちこたえて一緒に遊ぶ体験をした。納得しないままに大人の道徳観に従うのとは違う、もっと人間的な体験だったと思う。近ごろ私はいろいろな子どもで似たようなことを経験している。

異文化を尊重する

幼稚園のK園長先生は、交流を進めながら「互いの文化をだいじにしましょう」と言われる。私もそう思う。同種の仕事をしていても、長年の間につくってきた小さな手順、しきたり、考え方、つまり文化には違いがある。そのようになっている「いま」を互いに尊敬することが第一ではないか。養護学校の子どもが幼稚園に行けばそこの家風に従うし、幼稚園の子が養護学校に来れば、こちらの家風に従う。そして両方の子どもが交わったとき、具体的に葛藤が起きれば、子どもたちが納得するように大人が間に入って（あるいは入らないで）経過をたどるうちに、新しいやり方が生まれるのではないだろうか。

変化の時代には、どのように変化するかは分からぬままに、ひとりの人間に戻って、人の中に良いものがあることを信じて交わってゆくよりほかない。そして、幼児は新しい社会をつくる対等な一員である。

TO・NI・KARA ひろば

その二

嶺村法子

私たちの園では、四季折々の風を感じるために、月に一、二回は園外へ出掛けるようにしています。

月島から有楽町線を使ってクローバーやたんぽぽの咲く辰巳の森公園へ。さらに京葉線を乗り継いで葛西臨海公園に潮干狩りに。新しくできた大江戸線を使うと、緑豊かな浜離宮や神宮外苑にも乗り換えなしで行くことができます。

隅田川テラスをてくてく歩き、勝どき橋を渡って聖路加タワーに登ったり、川の向こうにある区立幼稚園やアスレチック公園を訪ねたり、はたまた、晴海埠頭から世界一周の旅に出る船の見送りに行ったり、レインボーブリッジを眺めながら海風を受けて凧揚げをしたりもします。

中でも、江東区の江戸川総合レクリエーション公園は、水遊びのできるバラいっぱいの西洋庭園あり、幼児にちょうどよいアスレチックあり、ポニーに乗れる広場あり、園内を走るかわいいシャトルバスありで、初夏の遠足にはもってこいの公園です。私たちの園でも、ここ数年四・五歳児一緒にバスに乗って出かけていました。

ところが今年は、遠足予定日に複数の団体がすでに申し込みを済ませていて、ポニーにも乗れないし、アスレチックも混雑しそう…。そこで急遽、行き先を変更し、神宮外苑児童遊園（トリムスポーツセンター）に行くことにしました。

当日こちらは貸し切り状態で、アスレチックも遊び放題！　隣接する芝生広場は、夏の間ビアガーデン（知る人ぞ知る森のビアガーデン〝森ビ

ア〟）になるための工事中で入れませんでしたが、幼児用だけでなく、小学生向けのアスレチックまで十分に楽しむことができました。

お弁当もそろそろ食べ終わり
ひとりふたりと片づけを始めた頃
誰かが「これなんだろう？」と
なにやら書いてある紙を見つけた
その紙には

○○グループのこどもたちへ
このちずをみて　たからをさがせ
たからをぜんぶみつけたら
かえりにおやつをやろう
たからは　やまのなかじゃ
おかしのいえのまじょより

と書いてあった
「ねえねえすごいことが書いてある。ちょっと来て来て」
魔女からの手紙が見つかったニュースは
お弁当を食べている子どもたちの間を駆け巡り
他の四つのグループも　年中のたんぽぽ組も
競い合って手紙を見つけてきたのだが
子どもたちは　そこではたと考えた
「どうしてグループの名前を知ってるんだろう」
「先生、魔女に教えた？」
「教えたりしないよ。先生は魔女とお友達じゃないからね…あ、でもそういえば、昨日うみ組の窓からカラスが見てたっけ…」
そこへ突然

TO・MI・KARA ひろば

ばさばさっと怪しいカラスが舞い降りてきた
「あ、魔女の家来だ！」
何というタイミングのよさ（カラスに感謝！）
魔女の手紙が一気に真実味を帯び
子どもたちの緊張が高まっていく
地図をもった子を先頭に
ムカデ競争よろしく友達の肩に手を置いて
そろりそろりと歩いている
「山の中って子どもだけじゃ行けないんだよね」
「そうね。魔女に連れて行かれたら大変だもん」
子どもたちは互いに深くうなずき合い
「早く！　先生早くお弁当食べてよ！」
とせかしてくる
こわごわと
長い滑り台のある山の横の

鬱蒼とした滝の前まで行ってみる
「あの暗い山の上の方が怪しい。勇気のある子どもたちは探しに行こうよ！」
駆け上がっていくうみ組に
たんぽぽ組も続いていく
「あれ、何か光ってる！」
一個目の宝を発見
「先生取って…」「取ってごらんよ」
「先生あけて…」「あけてごらんよ」
「何か入ってるよ」「何だこれ…」
二個目も発見
「んー？　何だかよくわからないよ…」
三個目発見
「あ、合う！」
「パズルだ！」
七枚の紙をつなぎ合わせると

TO・NI・KARA ひろば

きょうのおやつは　あめじゃ

と言う文字が表れた
あまりの怖さで泣いていた
たんぽぽ組の子どもたちも笑顔になる
「魔女がアメくれるんだって！」
けれども…
待てども魔女は現れず
「魔女が嘘ついた」の大ブーイングの中
バスが出発
ところが…
「あれ、この袋、何だろう？」
バスの座席に怪しげな黒い袋があって
中には
子どもたちの待ち望んでいたアメがどっさり

「見て、このアメなめると金色に光るんだよ」
金色の丸いアメを舌の上にのせて
互いに見せ合っているうちに
もう幼稚園に着いてしまう
出迎えの園長先生に
「魔女から手紙が来たんだよ」
「魔女がアメくれたんだよ」
と口々に報告
後日　子どもたちの遠足の絵には
あの日会えなかったはずの魔女の姿が
生き生きと描かれていた

ちょっと前、セーラームーンが一世を風靡していた頃、♪偶然をチャンスに変える生き方が好きよ～と歌われていたが、子どもたちの生活はまさにその連続だろうし、保育の仕事にも、この歌のような前向きな姿勢が求められるのではないかと

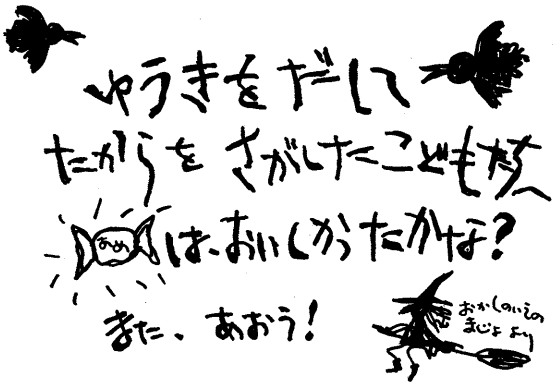
思う。

私には、娘が三年間の長きに渡って保育園で楽しんで（怖がって？）きた魔女探しの探検ごっこを、いつか幼稚園でもやってみたいという思いがあった。今回遠足の行き先を変えたことで実現のチャンスが訪れ、カラスに助けられて魔女の存在はぐっとリアリティを帯びたものになった。

今ここで子どもとどのような世界を作り上げ、どのような楽しさを共有するかは、あたためてきた思いや、その場でのひらめきといった保育者の感性によるところが大きい。同じ計画でも、別の保育者が投げかければ当然別の展開があり、それが保育の醍醐味でもあり難しさでもある。

保育者養成にかかわる先輩と話すとき、そのような感性に支えられた子どもへのかかわり方は、養成校で教えたり学んだりすることができるものなのかどうか、ということがいつも話題に上るのだが…、それはさておき、久しぶりに仕掛人の楽しさを味わうことができた。

（中央区立月島第一幼稚園）



子どもという驚き

柴坂　寿子

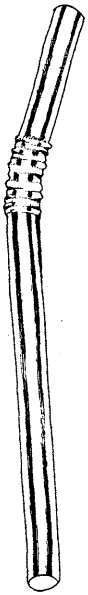
ある保育園での驚き

私が初めて観察に行ったのは東京郊外にある公立の保育園だった。まだはいはいもしない赤ちゃんや、もうすっかり歩ける子までの六人がいる〇歳クラスを中心に見始めた。それまで特に子ども好きというわけでもなく、子どもにこれといって接点もなかった私にとって、初めて間近に見る子ども達という存在は驚きの連続だった。寝そべっている赤ちゃんが足でベビーベッドの柵を握っているのも、初めて見たときは心底びっくりした。

このクラスに初めて行ったときから嬉しそうに

寄ってきて、行くたびに近づいてきて抱きついてきたり、おもちゃをくれたり、記録を取っている私の鉛筆を取り上げたり、何かと構ってくれた子がいた。お醤油顔のおかっぱ頭のKちゃん。そのうち私が保育園に行くと、「今日はKちゃん休みよ」と保育者の方が声をかけてくれるようになった。さらにある日保育者の方に「Kちゃん、先生のこと好きみたいねー」といわれて、そんな風に考えても見なかった私はまたびっくりした。保育者の方が「Kちゃんのお母さんに感じが似てるからかなー」というので、私が「お母さんてどんな方なんですか」と聞くと、保育者の方に「うーん、あっさりしてるかな」といわれ、なぜかちょっとがっかりした。でも子どもになつかれるという初めての経験は相当いい感じだった。私が私であるということを分かっているんだということも不思議だけれど嬉しいものだった。

自由に移動できるのはこのKちゃんという子くらいだったから、子ども達同士のやりとりも起こりにくい状況だった。しかしご飯時に保育者の方達が子ども達をベビーチェアに座らせ、互いに顔が見えるような席に着かせると、状況は一変した。誰かがスプーンでとんとんとお皿をたたき出すと、他の子もそれにあわせてとんとんたたき出し、スプーンがない子は手のひらでとんとんテーブルをたたく。みんなそろってとんとんとん、口を開けて笑い顔の大騒ぎになった。他にも唇をぶーっと振るわせたり、頭を横に振ったり、手を横でぶらぶら振るわせたり、一人がやり出すとそれっと他の子ども達が同じことを一緒にやり出すという感じだった。こんな



小さな子ども達が他の子達といることをこんなにも楽しんでいるというのも本当に大きな驚きだった。

みんなが歩けるようになると目立ってきたのはお昼寝前のかくれんぼだった。始めは窓際のカーテンを使ってのいないいないばーだったのが、そのうちカーテンの陰に何人も隠れて、それを鬼が外からぎゅっと捕まえる、動きの大きい遊びに発展していった。お昼寝前になると決まって誰かがカーテンに隠れ始め、他の子も続々と隠れていく。そしてそのたびのきゃあきゃあ笑い顔の大騒ぎ。それが毎日毎日同じ時間帯に繰り返される。私にとってはご飯時の大騒ぎとともに、「これはいったい何なのだろう」とその後ずっと考え続けるテーマになった。

〇歳クラスの部屋に行くのには一歳クラスの部屋を通り抜けていくので、一歳クラスの子ども達の様子もちらっとではあるが見ていた。一歳クラスも賑やかなクラスだったが、その中に一人だけほとんど話さないおとなしい女の子、Aちゃんがいた。お天気のよいある日、〇歳・一歳が合同でお散歩に出かけることになった。出かけた先の公園で、私はいつものように子ども達からちょっと離れて子ども達が遊ぶ様子を見ていた。ふと気づくとAちゃんが私のすぐそばに座り込んで地面を掘っている。「何でこんな近くに」と驚いたけれど、Aちゃんの安心しきった様子に、そのまま子ども達を見続けた。彼女は地面を堀り、私は子ども達を見る。違ったことをしながらゆっくりと流れる時間を一緒に過ごすという、気持ちの休まる体験だった。次に保育園を訪れたとき、いつものように一歳クラスの部屋を通り抜けようとすると、Aちゃんが鈴の鳴るような小さな高い声で「おはよう」と挨拶してくれた。びっくりした。初めて聞くAちゃんの声だった。

ずっと後になって、違う幼稚園や保育園で、ふと気づくと私のそばに子どもが座っている体験を何度

もすることになった。ちょっと体調が悪かった子や周りの展開の早さについていけないでいる子。きっとその子達にとっては子ども達の輪からちょっと離れている私は自分と同じ仲間に感じられたのだろう。

ある日園庭で子ども達の様子を見ていたとき、ふっと気づくと一歳クラスのYちゃんが太鼓橋のてっぺんで固まっている。はいはいで登って行って、にっちもさっちもいかなくなったらしい。周りを見渡しても保育者の方が見あたらない。走って飛んでいってYちゃんを降ろし、ちょうどやってきた保育者の方に引き渡した。次に保育園を訪れたとき、一歳クラスを通り抜けようとしてYちゃんと目があった。Yちゃんのうるうるした目は「感謝してます」と私に言っていた。五十年近く生きてきて、あのときほど自分が感謝されていると感じたことは後にも先にもない。

また別の日、一歳クラスのある子がおもちゃを独り占めして、それを怒った一歳クラスの子ども達がその子を取り囲んでいた。特に怒っていたのがRくんという男の子で、おもちゃを抱えて離さない子に向かって、「やいやいやいやいやいやいやい」と言葉にならぬ言葉で真剣に非難していた。音は確かに「やいやいやい」でしかなかったけれど、それは私の耳には「みんなのおもちゃなのに独り占めしてずるいぞ」という非難に聞こえた。Rくんには明らかに伝えるという意図があった。まだ言葉が言葉になっていなくても、Rくんは自分自身が持っている手段で非難を思いっきり表現していた。言葉が言葉になっていなくても「非難」は十分伝わっていた。Rくん

自身、自分の言葉が伝わることはみじんも疑っていなかっただろう。

園庭にいるとき音楽がかかると、立てるようになっていた〇歳児達が満面の笑い顔になって体を揺すり始める。一歳児達が部屋から園庭に出たとたん、突然だーっと走り始める。そんな光景にも何度も驚いたものだった。「そこに音楽があるから」「そこに空間があるから」としか言えないような光景だった。

こんな小さな時から、といつも思う。一人の特定の人として相手を見ること。人と同じことをして楽しむこと。人と一緒にいるだけで安心すること。人と小さな出来事を通してつながること。子ども達が何かを伝えようとし、言葉でなくてもそれを確信を持って表現し、それが伝わってしまうこと。子ども達が周りのものから何かを同じように感じ取り、同じように動くこと。それらはどれも私にとって大きな驚きだった。

「子守り」体験での驚き

私が留学したドイツの研究所には、子連れ出勤をしているアメリカ人の女性研究者がいた。世界のあちこちを自分や連れ合いの仕事のために転々としていて、Sくんという子どももちろん一緒に転々としていた。Sくんは初めて会った時は四歳くらいで、小柄でシャイな少年だった。ごっこ遊びが大好きで、なぜだか私とウマがあい、研究所にくると私の部屋に遊びに来るようになった。ある日、Sくんと私は朝からレゴでさんざん遊んで、さすがにもうそろそろ引き取らねばと思ったらしいお母さんがSくんを引き取りに来た。Sくんはまだまだ遊びたい様子だった。私がなんとか遊びを終わりに持っていこうと算段していると、Sくんが突然私に、「このレゴは僕が作ったんだよね。だから僕が壊したって

いいんだよね」というと、あっという間にせっかく作ってあったレゴをめちゃくちゃに壊してしまった。いつもはおとなしい子なので、その勢いに私もお母さんも呆然とした。壊してしまった後、Sくんはとても悲しそうだった。だますようにして無理矢理終わらせようとする私に、裏切られたような気持ちだったのだろうと思う。私もお母さんも深く深く反省した。

一年ほどしてだったろうか、この家族がまた別の研究所に行くことになった。Sくんは私の部屋にやってきて、「あげる」と小さな紙包みをくれた。開けると小さな箱で、中には研究所のあちこちで集めたらしい、フイルムの切りくずや、細かな紙切れがたくさん入っていた。「寂しくなったときにはね、この箱を開けるの。そうすると楽しくなるんだよ」と遠くを見るような目をしてSくんは説明してくれた。きっとそれは君自身のことなんだねと私は思った。まだ五年くらいしか生きてない人がこんな重い言葉を口にすることが驚きだった。何人もの友達と別れてきた悲しい体験が分かるような言葉だった。

二、三年してまたこの家族が研究所に戻ってきた。もう小学生になっていたSくんに「ほら、ああいってこれくれたの覚えてる?」と箱を見せると、「え、僕、そんなこと言った?」と嬉しそうに箱を見て笑った。

Sくんには最初の滞在の時、弟が生まれていた。二度目にあったときにはすっかりやんちゃ坊主になっていた。でもSくんに増して、お母さん子だった。このNくんもお母さんに連れられて研究所にやってきて、ときどき私の部屋にも来るようになった。Nくんのお気に入りは私の膝の上に座り、「日本語」と称して字のようなものを書くことだった。お母さんが迎えに来ても「いい」といって行かず、

お母さんは笑って、「いつも私から離れたがらないのに、あなたはどんな魔法を使ったの？」と私に言った。私はちょっと得意な気持ちだった。ある日いつものように「日本語」の練習をしていると、お兄さんのSくんが学校帰りにやってきて、兄弟二人での遊びになり、そしてあっという間にけんかになった。泣き出したNくんに私が手を差し出そうとすると、Nくんは「ママー」と泣きながら私の横をすり抜けていった。愕然とした私の頭に、なぜか「愛着」という字が浮かんだ。やっぱり大変なときは「ママ」なんだよね、これが「愛着」ってことなんだよねという悟りであった。もちろん「魔法使い」の得意げな気持ちはぺしゃんこだった。

この二人の兄弟げんかはすさまじかった。Nくんが幼稚園に行き始めた頃だったか、二人で私の部屋でゲームをしていて、何が何でも勝ちたいSくんがちょっとずるをしたらしい。Nくんが私にそのことを訴えたが、ずるなのかどうなのか私には分からず、Sくんに問いただしたりしていると、Nくんがかーっと怒って、私に「Sの味方なんだ！」と怒鳴って部屋を出ていってしまった。そしてそれ以来もう二度と私の部屋に遊びに来なかったのである。その徹底ぶりにはほんとうに驚いた。赤ん坊の時はミルクを吐かれたりしながらもせっせと子守りしたのにと、ちょっと恨めしくもあった。

私のもう一つの子守り体験は、ドイツで一時下宿していた家の子どもである。大家さん夫婦が住んでいる一軒家の一部を借りたので、大家さん夫婦の当時四歳くらいだった男の子、Lくんがしょっちゅう遊びに来るようになった。まだ字が読めないLくん

は私が持っていたドイツ語の絵本を引っ張り出してきて、「読んでくれ」という。外国人である私が、子どもとはいえドイツ人に読み聞かせというのも不思議なものだった。でも、Lくんはめちゃくちゃいたずら坊主で、私はいつもやられてばかりだった。そのLくんの唯一の弱みが字が読めないことだったので、喜んで読むことにした。ある時、彼が選んで持ってきた本は昔のしつけ用絵本の復刻版だった。その中のお話の一つは、親指を指しゃぶりしてばかりいる男の子がいて、ある日も指しゃぶりしていると、突然仕立て屋がきてハサミでちょきんと親指を切ってしまうという恐ろしいお話だった。読み終わって、げーっ、怖い話と思っていると、Lくんは絵本をしげしげと見て、「指がない」という。えっと驚いて絵本をよく見ると、手から血は出ているのに、落ちているはずの指は確かにない。よくこんなことに気づくものだと感心しながら、あまりしつけの効果はなさそうだなとも思った。Lくんのご両親はインテリで、このような今や教育的でない本は家にはないようだった。それでも、この本はLくんのお気に入りとなり、その後も私は何度となくLくんのためにこの本を読むことになった。

子ども達にはいつも意表をつかれてきた。こんなに小さいのにこんな深いことをと驚かされてきた。今も幼稚園に通うたび、驚いてばかりいる私である。

（お茶の水女子大学）

いま、子どもたちは

「教育相談」という仕事

高野久美子

私は、十数年心理援助職として、いくつかの相談機関で何らかの困難を抱えた子どもたちとその保護者の方の相談を担当してきました。それぞれの悩みや課題を持って、いろいろな年齢の子どもたちがお母さんやお父さんとともに相談室を訪れます。相談のあり方は多種多様ですが、基本は子どもたちの問題や保護者の方の悩みを「相談員が解決してあげる」のではなく、子どもたちがもともと持っている「成長する力」「生きる力」が十分に発揮できるよう相談員がさまざまな方法で援助すること、また保護者の方が自分自身で問題の整理をしたり、気持ちの落ち着きを取り戻して解決に当たることができるようお手伝いするという姿勢です。

相談によって内容は千差万別なので、プレイセラ

ピー（遊戯療法）や面接相談について、一言で説明するのは難しいのですが、たとえば、小学生くらいまでの子どもたちは、担当の相談員との信頼関係をベースに、安心できる空間・時間（相談室のプレイルームなど）のなかで、遊びを通して言葉で表すことができない気持ちやこころの内側を表現します。その過程で子ども自ら自信を回復していったり、生きるエネルギーを蓄えて、より成長した姿で現実の世界に戻って行きます。中学生以上の子どもたちのなかには、ゲームやパズル、料理、手芸、スポーツなどを媒介にしながら信頼できる人（相談員）と「ともに楽しむ」「ともに時を過ごす」という経験をしながら内省するきっかけを得たり、その思いを相談員に語りながら思春期の混乱から一歩ずつ抜け出ていく子どもたちも多いようです。また、面接というかたちで、自分の思いを語り自分自身の気持ちや考えの整理をしていくことが問題解決につながることも少なくありません。

保護者の方の相談もさまざまです。相談室を訪れるきっかけは、子どもの不登校だったり集団不適応だったり、いわゆる「困った問題行動」がほとんどです。今すぐ解決策を教えてほしい、という方やいろいろがんばってみたけれどだめだった、と疲労困憊の様子の方、親としてどうしていいのかわからない、と困惑しきった方もいらっしゃいます。（発達上の課題のある場合は少し対応に違いがありますが）必要に応じて具体的なアドバイスも行うことはもちろんですが、保護者の方にこれまで努力されてきたことをねぎらった上で「相談員が解決するということではなく、何が最善か親御さんと一緒に考えて行きたい。なによりお子さんの一番そばにいらっしゃるのはお母さんやお父さんですから」とお伝えするようにしてい

ます。

「何も教えてくれない」「こっちの話を聞いているだけ」と不満を感じられる方も、一回五十分の面接を定期的（頻度はケースによって異なる）に行う中で、相談員からの質問や確認、感想を受け答えするうちに保護者の方が子どもについて新たな見方を試してみたり、思いもかけなかった自分自身の気持ちに自ら気づき、子どもとの対応が自然と変容していくことが多いのです。そうした変化に子どもたちは敏感に反応し、子ども自身のありようも変わってくるということが少なくありません。ここでは、ある保護者の相談を例にとって、教育相談の仕事の一部をご紹介したいと思います。

私がある相談機関で担当したお母さんの相談事例（プライバシー保護のために内容は改変してあります）は次のようなものでした。そのお子さん（A君）は男の子でしたが、乳児のころから夜泣きが激しく、いくらあやしても泣き止まない、歩くようになってからは、どこに飛び出していってしまうかわからないので三歳近くまで外出はおんぶだった、とっぴな行動が多かったので、次に何をやるかいつもハラハラしていたということでした。幼稚園に入っても落ち着かないうえに友達とうまく遊べずケンカしてしまうことが頻繁で、一斉保育にはほとんど入ることができなかったということです。お母さんは、この状態をなんとかしたい一心で、何かあるたびに友達を家に大勢呼んでパーティを開いたり、空手クラブ・体操教室・幼児教室に通わせたり、いくつもの病院に通って検査を受けたり相談をしてきたということでした。

幼稚園年長組の時に、就学を前に継続的な相談をしたいということで、当時私が所属していた相談機関に相談を申し込まれました。お母さんの面接を私が担当し、ほかの相談者がA君の療育を担当しました。「なんて大変な思いをされてきたことか」と思いつつ生育歴を伺っていたのですが、気になること

がいくつか出てきました。そのうちのひとつが、一週間のA君のスケジュールでした。そのお母さんは、A君に一週間のうちほとんど毎日を習い事や相談に通わせていて、ゆっくりお母さんと二人で過ごす時間がとても少なかったのです。お母さんの苦労を労りつつも、何回かの面接でそのことを話題にしたあとでお母さんは「専門家の手にAを預けているほうが自分が安心できた」「今まで私は、友だちともうまく遊べずつらい思いをしているAをかわいそうと思っていたのではなく、こんな子を持った自分がかわいそう、と思っていた。でも、いまは、この子自身が一番大変な思いをしているんだ、と実感できる」と語り、A君に対する自分の気持ちを見直し始めました。「Aをかわいいと思えない自分に対する負い目」もあって、習い事をさせていたというお母さんは、少しずつA君といる時間を長く取るようになり、かわいらしい面も発見するようになりました。いくつかの紆余曲折を経て、お母さんとの関係が変化してくるとA君も感情を少しずつコントロールできるようになり遊ぶ友達も数人できました。一方、A君自身に発達上の偏りがあることもわかり、学校などの集団生活を送ることには難しい面もあったので小学校就学後も療育は継続し（お母さんの相談は不定期）、小さな波風はありながらも、A君なりに毎日を楽しく過ごすことができるようになりました。

この事例は、A君に発達の偏りというハンディはあったものの、お母さんが子どもに対する自分の気持ちに自ら向き合ったときに、発達上のハンディの上に上乗せされていたメンタルな問題をある程度払拭することができたケースです。こうした保護者自身が自分では見つめることが辛い内面の声や思いに耳を傾けたり、向き合うためのお手伝いをすることも、教育相談の大きな仕事のひとつのように感じています。

（文京区教育センター）

モンテッソーリ教育思想の誕生(5)

近代社会と知性の形成

早田　由美子

モンテッソーリは医学、生理学、知的障害児治療教育、人類学や生物学、女性解放思想から影響を受けた。また、ルソーやフレーベル、カントなど近代の教育思想家の思想も学んでいる。様々な学問や思想を学んだモンテッソーリは下層の子ども、障害を持つ子ども、そして、女子に対するまなざしを深めていった。下層の子どもは労働のため学校にいけず、障害のある子は精神病院に閉じ込められ、女子には学問や教育は不要とされるか、男子よりも数歩下がった内容が伝えられた。学習の機会は限られ、就学率や識字率には大きな格差が生じていた。

これらの子どもの多くは知の世界から遠ざけられており、知識や技術の獲得にハンディを負っていた。彼らが弱い立場に押しやられたのは、能力の原

理が幅を利かせる近代社会が進展する中で、知の世界から遠ざけられていたことと関連がある。

モンテッソーリはローマの障害児施設で、また、同じくローマのスラム街で教育活動を行い、そこで、知性とは無縁と考えられていた障害児やスラムの子どもや女子にも知的好奇心や集中する心があることを見出した。モンテッソーリが知的教育を進めたのは、まず、知りたい、読みたい、書きたいという子どもの並々ならぬ好奇心を見出したからである。この子どもの発見は、子どもを受容し、子どもをよく見てよく知るというモンテッソーリの基本姿勢と深い関係がある。また、女性解放思想に学んでいた彼女が、女性を劣等な性と見る当時の偏見に満ちた女性観から解き放たれていたことも女子の行動を偏見を持たずに観察する原動力となった。モンテッソーリは知の世界から引き離されていた子どもたちに教育を行い、知力の基礎を獲得させる方法を築き上げていった。

では、その教育、特に、知的教育にはどのような特色があるのであろうか。今回はこの点について考えてみたい。

生命の援助と知的教育

モンテッソーリには「生命の援助」という基本思想があった。彼女は、教育によって生命を枯渇させるのではなく、生命の開花を援助しようとした。われわれは、勉強をさせると人間の生き生きとした部分が失われると考えがちだが、モンテッソーリは知るということと生き生きとした生命力とは相反さないものであると考えた。考えたと言うより、そのような知に向かう子ども達の様子に何度も出くわし、その経験を生かして活力ある知性の形成がすべての子どもにとって可能なものとなるような原理を確立

しようとしたという方が正しいであろう。そして、そのために、子どもの自由と自発性を重視し、興味と関心に基づいた活動を援助した。

モンテッソーリが「子どもの家」で試みた教育内容はさまざまで、生活の技術に関わるものから、体操や動植物の飼育栽培、手作業や読み書き算数に関するものまで多様であった。それらは、認識能力、言語その他の表現能力、労働能力、家事能力の形成と深く関わるものであった。それらの多くが広い意味で、後の知の発展につながる基本的能力と言えるものである。

感覚教育と知性

モンテッソーリ教育の柱の一つは「感覚教育」である。彼女はイタールやセガンの生理学的方法を受け継ぎ改良しながら、子どもが自分の手や目や耳や鼻や舌などの感覚器官を個別に用いて、触ったり、見たり、聴いたり、味わったり、嗅いだりできるような教具を工夫した。子どもは個別の感覚を用いる練習を通して自分の感覚機能そのものを意識するとともに、もののさまざまな性質を段階的、体系的に知る。そして、自分の感覚を拠り所にしてものを確実に知る。その際、注意深く見る、比較する、判断するなどの活動を行う。これらの活動を通して、認識力、思考力や分析力、集中力といった知的能力が形成されていくのである。ものや環境に対する関心をもつこと、それに対する見方を学ぶこと、集中してものを見ること、そして、ものの相違を注意、比較、判断することによって理解し考える力を持つことは知性の基礎と言えるであろう。

また、モンテッソーリは、感覚教育を知性の形成と結びつけただけでなく、自己教育とも関連づけた。感覚を刺激することで子どもの興味を喚起して自主性を呼び起こす。子どもは感覚を用いて確認す

ることにより自分で答えを見つける。好きな作業を繰り返すことによって自然に活動を完成度の高いものにする。自分で誤りに気付き、自分で訂正する。この自己教育という考え方は、感覚教育にとどまらずモンテッソーリ教育の中心的概念となっていったのである。

知性の基礎としての読み書き算数

モンテッソーリは書く、読む、数えるという言語や算数の分野も独自の形で発展させた。

彼女は、はじめ、幼児教育にこの分野を導入することに疑問をもっていたのだが、子どもの知りたい、読みたい、書きたいという要望に出会い、それに応えようとした。

モッテッソーリは、公式の学習や概念の単なる伝達は行うべきでないと考えており、子どもたちが観察し、分析し、新鮮な発見をするまで待つことを基本とした。しかしただ待つだけではなく、子どもの気持ちに沿えるようにできるだけ「合理的な方法」を模索した。そして、子どもが理解したり模倣したりする場合、過度の努力をしないでもすむように「容易に成し遂げられ、無限に広げられる征服の喜び」に変えられるように工夫した。つまり、発見や理解を容易に導くための様々な工夫である。その際、すぐに目的とする活動を行うのではなく、目的を無理なく達成することができるようにその準備のための活動（例えば、運動能力、作業能力の養成）を、子どもの能力や関心に合わせて充実させようと

した。

また、医者であったモンテッソーリは文字の読み書きを医学的生理学的メカニズムの中で捉えようとした。言語の構造と感覚、運動、脳との関係を考察することによって書き方や読み方を容易に楽しく、確実に学べるようにしようとした。

例えば、書き方に関しては、次のような順序で進めた。はめ込み形をなぞって図形を書く。図形の内部を色鉛筆で塗る。サンドペーパーでできた文字を（目を閉じて）なぞることを繰り返す（これらの動きは、実際に文字を書かないで書く準備となる動き〈筋肉運動〉を繰り返すことで手の運動能力を向上させるという意味がある）。さらに、カードの文字を仕切り箱に入れる。アルファベットの文字を組み合わせて単語を構成する（これらは文字の比較と選択を通して文字や単語の構成を認識するという意味を持つ）。

こうして手の動きと文字の認識の両面からアプローチすることによってそれぞれの能力を高め、誰もが自然に、無理なく、文字を習得できる方法が考えられたのである。

知る喜び、分かる喜び

重要なことは、子どもたちの活動が「新鮮な発見」、「知る喜び」、分かる喜び、できる喜びに満ちあふれているということである。モンテッソーリは子どもの知への喜びの場面をしばしば表現している。

例えば次のようなくだりがある。

「それらの最初の日々、われわれは激しいまでの感動にわれを忘れた。あたかも夢の中にいるようであり、何か奇跡的なできごとに居合わせているかのようであった。はじめて一つの言葉を書いた子どもは大変大きな喜びで一杯であった。私はすぐに彼を産

卵したばかりの雌鳥にたとえた。本当に誰もその小さなやかましい発表から逃れることはできなかった。彼は誰にでも見るように呼びかけ、動こうとしない人には、衣服をつかんで無理やり連れていこうとした。皆、書かれた言葉のところに行かなければならなかった。そして、その素晴らしさをほめたたえ、驚きの叫びを幸福な作者の喜びの叫びに合わせることになった」(『科学的教育学の方法』)。

子どもの様子は喜びと驚き、そして、自信にあふれている。

また、指示が書かれているカードを子どもたちが選択して読み、指示に従って活動をするゲームでは次のような記述がある。

「私が書き終わるやいなや、子ども達はカードをつかみ、インクを乾かすために机の上に置き、わき目もふらず注意を集中させて自発的に読んだ。静まりかえる中で。私はそれから尋ねた。『理解できますか』『はい!はい!』『それではカードが告げていることを行いなさい』そして子どもたちがめいめい敏速に、一つの活動を選び、それを正確に行うのを感嘆して見た。その時偉大な活動、新しい種類の動きが部屋に生まれた。日よけを閉めて、再び開けるものがいた。他の子達は仲間を走らせるか、または歌わせていた。字を書きに行くものや食器棚に物を取りに行くものもいた。驚きと好奇心が全般的な静粛を生み出していた。その素晴らしい行動は激しい感動の中で展開した。魔法の力が私から出て、これまで未知であった活動を刺激しているかのようであった。この魔術は、《文字言葉》、すなわち、文明による最も偉大な成果であった」(『科学的教育学の方法』)。

この活動の中には、多様な内容が含まれている。文字を読んで理解すること、理解できる喜びによって自発性が引き出されること、文字による指示を通

して様々な活動が行われること、一人でする活動だけではなく、他の子どもへの依頼や働きかけ、参加と協力が必要な活動が含まれていることなどである。モンテッソーリはこのような子ども達の動きを「自発的規律の予期しなかった完成」とも述べているが、様々な要素が織り成す中でこのような喜びの中で行われる活動が構成されたと考えられる。

限定性と普遍性

モンテッソーリは書き方も読み方も、子どもが行いやすいこと、分かりやすいこと、興味をもつことをまず行い、それを熟達させて、次のステップに進む方向を考えた。学問の系統性や体系性を重視し、誰もが基礎的内容を着実に段階を踏んで習得できるように整理して示そうとした。子どもは無理なくできる事柄から始めるので安心して繰り返して行い、知的好奇心を継続させながら次のステップに進む。

しかし、モンテッソーリの方法には限定的な面もある。教具は一定の使用方法にそって使わなければならず、定められた目的以外の目的のためには使用できないということである。子どもの活動が教具に規定される面をもち、その限定性は子どもの創造性を妨げるものとして批判の対象にもなっている。

しかし、その限定性によってモンテッソーリ教育法の普遍性がもたらされたとも言える。教具の目的と方法を定めるということは、教具を通して伝える内容を限定するということを意味するが、それは逆に言えば、子どもが習得する内容がはっきりしているということである。その内容はモンテッソーリが多くの教具を試す中で子どもが習得すべき基礎とは

何かの吟味を行いながら、子どもの興味に合わせて取捨選択して導き出されたものである。各々の教具が伝える内容は限定されるが、教具の豊富さによって多くの内容が確保されている。自由な活動という原則の中で、好きな作業（教具）を選びながら最終的にはどれも体験することによって、どの子どもも同じ基礎的内容を確実に学ぶことになる。

モンテッソーリは誰もが就学前に学ぶべき基礎を選び明確な形で提示した。感覚を刺激し、興味を引き出しながら、認識力、思考力、分析力、集中力などを形成し、知性の発達へ導こうとした。

しかし、すべての子どもが自由の中で同じ目標に到達するかは分らない。自由のなかで、子どもははじめて興味をもって活動に打ち込めるが、それにより子どもの格差が拡大する可能性はある。それを個性とみなすのか、埋め合わせるのか。自由によってもたらされる格差についてモンテッソーリは言及していない。

モンテッソーリはむしろ自由な活動で興味を持って物事に向き合うことを重視し、それによって子どもの「生命力」を援助しようとした。それを基本として、どのような子どもも知性を育める教育システムを確立しようとした。人間が生まれ持っている共通の感覚を教育することを通して少なくともスタートの地点では同じ認識能力の基礎作りをめざし、幼児に対しても知の扉を開こうとしたことはモンテッソーリの独自性である。

激しい階層差別や性差別、劣悪な生活環境の中で育つ幼児に対して、家庭環境や性役割規範によってもたらされる不利を認識能力、すなわち、知性の発展の基礎を形成して補おうとした点にモンテッソーリの思想の歴史的意義があると思われる。

（夙川学院短期大学）

編集後記

娘は三月に中学を卒業しました。卒業アルバムや文集を見ていると、思い出されることがいくつもあります。中でも、三年生の体育祭は印象深いものでした。

全校で、赤・青・緑・黄の各組（シスター）に分かれ、総合優勝、応援賞を競いました。娘のクラスは青組で、一・二・三年の青組が競技に応援に力を合わせ、結果、両方の優勝を手にしたのでした。

わが家の居間にはそのときにシスター全員で撮った写真が飾ってあります。一人一人の喜びが、それぞれの手足からほとばしり出ていて、いつ見てもうれしくなります。まるで一〇〇人が一つの生き物のようにみえます。

青組の雰囲気のよさは二週間続いた練習の間に私にも伝わっていました。その間の夕食の話題は、応援の振り付けや日に日に増えていく〝○○・コール〟です。例えば〝マッスル・コール〟といえば、手拍子をしながら〝おねがーい・しまっする・しまっする　優勝・しまっする　しまっする・しまっする　応援賞・とっちゃうよ！〟と始まります。

聞いていると、リーダーたちの打ち合わせの中で次々と新しいものができ、それがたちまちメンバーにも広まって、当日、気がついたら優勝していた、ということです。

当日の応援合戦では、リーダーとメンバーとの間にある青組の一体感を感じました。（A）

幼児の教育

第一〇一巻　第六号
（二〇〇二年六月号）
定価五五〇円（本体五二四円）

発行　平成十四年六月一日
編集兼発行人　田代和美
発行所　日本幼稚園協会
〒112―8610 東京都文京区大塚二―一―一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
印刷所　図書印刷株式会社
〒108―8620 東京都港区三田五―二二―一
発売所　株式会社　フレーベル館
〒113―8611 東京都文京区本駒込
六―一四―九
☎〇三―五三九五―六六一三（営業）
☎〇三―五三九五―六六〇四（編集）
振替　〇〇一九〇―二―一九六四〇

☆　本誌ご購読のご注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

保育中、絵本を語ってあげるにはどの時間帯がよいのでしょう

「いつでも」「どこでも」「だれとでも」楽しめるのが絵本ですから、いつでもよいのです。
「朝の子ども、昼の子ども、帰る時の子どもの気持ちや行動は大きく揺れ動くので、子どもの変化に合わせた援助が必要」「緊張感みなぎる朝、行動力あふれる昼、調子に乗りやすい午後、気がゆるむ夕方、子どもの１日は大きく波打って展開する」ので、
・集中して絵本を楽しみたい時には、午前中の中・後半くらい。
・リラックスしてワイワイ楽しみたい時には、午後が向いているかもしれません。
逆に、「お話タイム」を決めて語る方法もあります。降園前の30分間を充実させようと、いつも早めに降園の用意をして、実行している保育者もいます。
ただ、いつでも、その時々で、子どもの状態をしっかりと感じ取り、どの場面でも子どもの声をよく聞いて、ねがいを持って絵本を手にしたいものです。

（第6章　保育絵本がわかるQ＆A　より抜粋）

いつでもそばに

保育絵本の楽しみ

阿部　恵・著

Ａ５判／296頁／定価：本体1,300円＋税

保育絵本を使って
保育の幅を広げるヒントが満載

保育絵本で子どもが育ち、保育絵本でいきいき保育が実現できるよう、本書を大いにご活用ください。

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育　第一〇一巻　第六号　平成十四年六月一日（毎月一回発行）昭和二十三年四月十五日第三種郵便物認可

「平成11年改訂　保育所保育指針」にそって新しくなりました。

改訂新版 保育の計画・作成と展開

最新刊

＊新しい保育所保育指針の考え方をふまえた保育の計画とその実際例を示しています。

＊計画の考え方、立案の手順などを丁寧に解説し、それぞれの園の実情にあった計画が立案できるように配慮されています。

＊立案された計画と、実際の活動（計画の展開例）を示し、計画の見直し、修正、そして実践と、計画と実践の関係が具体的にわかるようになっています。

＊産休明けから５歳児まで、年齢別に年間計画例、月指導計画例、日案例が掲載されてます。

＊今回の改訂で強調されている、家庭との連携にポイントをおいた計画例を掲載しています。

＊長時間保育、夜間保育など、子どもを取り巻く環境の変化による新しい保育課題に応じたさまざまな計画例を掲載しています。

著者
今井　和子　東京成徳短期大学教授
鶴田　一女　越谷保育専門学校専任講師
増田まゆみ　小田原女子短期大学教授

B５判　188頁＋折込6丁　定価：本体2,000円＋税

キンダーブックの
フレーベル館

定価　五五〇円（本体五二四円）☆

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。